

# コロナ状況下の台湾の芸能と防疫 「密」を取り戻すために



**長嶺亮子** ながみねりょうこ / 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員、AA研共同研究員

ゼロコロナからwithコロナへと方向転換した台湾では、人々で溢れ返る祭りの賑わいも、また普通の光景になった。参拝する人、神輿を担ぐ人、銅鑼を鳴らす人、時には奉納劇の登場人物でさえもマスクを身につけているけれど。

## 密になる台湾の民俗芸能

台湾がコロナ対策で成功をおさめたことは日本でも度々報道され、夜市を楽しむ台湾の人々の姿をテレビやSNSなどで見ては羨ましく思ったものだ。ただし、たしかに感染者/死者の数は他国と比べて圧倒的に少ないものの、2019年末のコロナの始まりから2022年現在において、台湾でも当然ながら感染拡大と減少の波を繰り返しており、その都度政策を改定しながら今日にいたる。台湾におけるコロナとのこの約3年間は、第一期[’19.12末→’20.3→’20.12中旬]、第二期[’20.12下旬→’21.5→’21.12中旬]、第三期[’21.12末→’22.5中旬→’22.9現在]の3期に区切ることができる。

台湾は「密」な社会である。都市部の生活空間や人口が過密で狭いという意味ではなく、伝統的に親族や居住地域、あるいは出身地の風習、信仰などさまざまなものが要因となってコミュニティが形成されており、その密な社会の中で人々はさまざまなものを共有しながら集団活動を行っている。民俗芸能も同じだ。台湾の民俗芸能は単独ではなく複数人で行うものが多いが、それは芸能が、たとえば労働時の呼吸合わせであったり、地域全体で取り組む行事の一環であったりと、共同体での共通目的のために行われることも関係するだろう。また、台湾の民俗芸能は人が楽しむだけのものではなく、神への奉納や祈りといった信仰実践の手段でもある。加えて民俗芸能は、現代では「私たちの」郷土を理解するために取り組む学校教育活動のひとつでもある。人と人との密になり、繋がり、民俗活動/民俗芸能活動を成り立たせてきた。だから、このコロナ状況下に世界規模で広がった「ソーシャルディスタンス(中国語で「社交距離」)」という合言葉は、台湾の人々に戸惑いをもたらした。本稿では、コロナ状況下で政府が発令した芸能文化に関わる政



マスクを着用して演じる(正新麗園歌劇団、彰化県、2021年12月、撮影者:姚郁敏)。

策と、それを受けて行われる芸能の一端を紹介したい。なお、多民族・多文化を擁する台湾だが、本稿では漢族系の民俗芸能を一例として取り上げる。

## 迅速で厳格(すぎる)管理

台湾政府のコロナ対策の成果は、初動からの迅速さ、医療やITの専門家を官僚に配した高い専門性、海外からの入国全面禁止やマスク在庫管理アプリの開発と活用、罰金制度など徹底した管理体制が功を奏したものと見てまちがいないだろう。こういった厳格な管理は民俗芸能にも及んでおり、たとえば文化部が2021年に公示した

「酬神演出防疫管理措施(奉納上演における防疫管理措置)」では、民間信仰の儀礼で演じる音楽や伝統劇などの出演者全員の健康管理チェックシート提出やマスク着用、ワクチン接種、PCR検査の実施義務などのほか、観客や現場の動線管理などについても細かに規定されている。ただ、厳格な安全管理を市民がまじめに共有しすぎた結果、夏場にマスクを着用して演舞するリスクや、マスクを着用せずに複数人で練習している姿を見た近隣住民が警察に通報するといった、社会問題に発展したケースも度々起きている。



## 芸能とソーシャルディスタンスとマスク着用

先に述べたように台湾では民俗風習が現代でも息づいていて、とりわけ民間信仰の儀礼と参加は、さまざまな意味で共同体の所属意識と結びついている。開路鼓カイルーグー（打楽器隊）や哨角隊シヤオジャオドワイ（ラッパ隊）に参加し練り歩いたり、奉納劇の舞台を観ることで、神の存在や郷土を再認識する。しかし、感染拡大時はソーシャルディスタンスの規定を守るために儀礼は延期や中止せざるを得ない。ある大祭では、政府が出した規定だけで延期や中止を判断するのではなく、筊ウラハとよばれる占いで神に伺いを立てて神が答えを出すという従来からあるプロセスで、祭礼の延期を決めた。それは、感染症に対する恐怖と神に対する畏怖の間で揺れる民衆の気持ちに折り合いをつける（神様が中止というなら仕方がない、として面目を保つ）ための策ともいえるだろう。

2020年と2021年の3月に開催予定だった全国学生音楽コンクール（全國學生音樂比賽）では、まだワクチン接種が普及していない10代への感染防止策として、団体部門すべてのプログラムが中止となった。全国学生音楽コンクールは合唱や洋楽器以外にも、国楽（中国楽器によるオーケストラ）と、北管/南管/客家八音という少数編成の伝統音楽合奏が含まれる。この時期は感染拡大によって「宅在家（ステイホーム）」政策がとられていたが、とくに感染拡大の第二期は学校の授業も体育や音楽を含め、リモートで行われた。一方で、集わないことには成立しない合奏音楽は完全に練習活動を休止せざるを得ず、また規制が緩和されて対面練習が可能になっても、笛や唢呐スナナといった吹奏楽器を多用する伝統音楽は、マスク着用や1.5mの間隔をとるというソーシャルディスタンスの定義に悩まされた。2022年は3年ぶりにコンクールが開催されたが、



中元節（お盆）の行列（新北市、2022年8月、撮影者：呉佳緯）。



中元節（お盆）の儀礼（新北市、2022年8月、撮影者：呉佳緯）。

本番中も吹奏楽器以外はマスクを着用するなど、多くの規則に従いながら行われた。

## 芸能とステイホームとネット動画配信

インターネットのビデオ通話は合奏には向かないが、芸能と動画配信とステイホームはどうやら相性がいい。感染拡大第二期に2ヶ月にわたり一切の民俗活動や舞台活動を取りやめざるを得なかった頃、台湾の伝統劇の劇団や役者らは動画配信を用いて活動を続けていた。ある劇団は過去の作品をYouTubeで無料限定配信し、ファンと劇団関係者が鑑賞しながらチャットで盛り上がる光景もみられた。かくいう私自身もその配信を心待ちにし、日本にいながら一緒になって楽しんだ一人である。もちろん、コロナ以前から動画サイトやSNSには芸能に関する投稿が数多く並んでいたが、それらは関係者による公式な投稿よりも、ファンなどによる非公式な投稿のほうが多い。伝統芸能と肖像権や著作権といった著作権問題について以前から議論されてきた台湾では、民俗活動の一環として屋外で無料上演される場合でも、撮影禁止あるいはウェブ公開の禁止を求められることも少なくない。作品を上演したり視聴覚メディアとして販売しその収益で活動する、すなわちプロの芸能家だからだ。コロナ状況下では一転し



葬儀の行列（淡水南北軒、新北市、2021年12月、撮影者：姚郁紋）。

て、ステイホーム中のファンを楽しませるためにネットで無料公開やライブ配信をし、ファンと密に繋がっていたのは興味深い現象だった。

## 芸能が現場に戻る時

それでは、芸能の活動の場がインターネットに取って代わられるのかということ、そうとも言い難い。単なる趣味や娯楽だけではない台湾の芸能は、担い手と観衆を含めた集団が現場で行ってのはじめて、信仰や文化継承といったその行為の目的を果たすからだ。空気を振動させて広がっていく音が空間を作り上げ、祝祭感を高め、連帯感を強める。

感染拡大第三期の現在、台湾政府はこれまでの「清零政策（ゼロコロナ）」から「重症清零、軽症管控（重症者はゼロ、軽症者は管理）」という、コロナと共に生きる方針に転換した。日常生活だけでなく、祭礼やコンクール、パフォーマンスの場も開かれてきた。マスク着用などの防疫対策を講じながら、「密」な民俗活動や芸能活動を取り戻しつつある。それは政府が示したルールにただ従うというよりも、一度止まってしまった芸能の空間を守り維持していこうとする、ひとりひとりの意思表示のようにもみえる。



コンクールの本番中も吹奏楽器以外はマスク着用が義務付けられる（新北市立丹鳳高級中學新聲丹鳳北管社団、新北市、2022年3月、撮影者：楊晨琦）。